

# 農作物技術情報 第3号 野菜

発行日 令和3年 5月 27日  
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部  
編集 岩手県農林水産部農業普及技術課 農業革新支援担当（電話 0197-68-4435）

携帯電話用 QR コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます  
パソコン、携帯電話から「<https://www.pref.iwate.jp/agri/i-agri/>」

- ◆ 全般 排水対策の実施、かん水設備の導入について検討しましょう。
- ◆ 施設果菜類 温度管理の徹底、草勢維持、病虫害防除に努めましょう。
- ◆ 露地果菜類 土壌水分と地温を確保し、活着促進に努めましょう。
- ◆ 雨よけほうれんそう ハウスの換気に注意し、適切なかん水を心がけましょう。
- ◆ 露地葉菜類 害虫の発生状況に応じた早めの防除を行いましょう。

## 1 生育概況

- (1) 施設果菜類は、半促成きゅうり、半促成トマト、ハウスピーマンとも収穫が始まっています。生育は順調～やや遅れで、地域によっては1週間程度遅れがあります。病虫害では、アブラムシ類の発生が見られています。
- (2) 露地きゅうり、露地ピーマンとも一部で定植が始まり、例年並みの5月下旬～6月上旬頃が定植のピークとなる見込みです。
- (3) 雨よけほうれんそうは、概ね例年並みの生育となっています。病虫害では、一部でハウレンソウケナゴナダニの被害が見られています。
- (4) 高冷地のレタス、キャベツの定植は前進傾向でしたが、低温により例年並みの生育状況となっています。一部で降霜の被害を受けたことによる生育のばらつきが見られています。
- (5) ねぎは、定植作業が進んでいます。一部で低温による生育遅れが見られたものの、全体的には順調に生育しています。

## 2 技術対策

### (1) 圃場の排水対策とかん水

例年、排水不良が原因と思われる生育不良が見受けられます。水田転作の場合は、水路等の点検整備を行い、圃場外からの水の浸入防止に努めるとともに、降雨後の排水を促すための明渠・排水溝の設置、高うね栽培とします。長時間滞水するなど排水不良が十分改善されない場合は、耕盤破碎や補助暗渠の設置も検討してください。

排水良好な圃場では、かん水を行うことにより生育促進、収量向上、施肥効率の改善などの効果が現れます。県内各地で簡易点滴かん水装置の導入も進んでいます。近年、定植直後や夏期など高温乾燥となる傾向にありますので、露地果菜類においてもかん水設備の設置・導入を検討してください。

### (2) 施設果菜類の管理について

日中の最高気温が30℃を越えないよう、こまめな換気を行うなど、温度管理の徹底に努めてください。果菜類全般に、気温の上昇とともに収穫量が増加し、草勢が低下してきますので、長期安定生産に向けて、追肥やかん水、整枝、誘引などの作業を遅れないように実施し、草勢の維持に努めます。

### ア きゅうり

根張り不良で草勢が低下している場合は、低段位の雌花を摘花します。また、側枝の発生が弱い

場合は枝整理を遅らせる等、草勢の確保に努めます。

定植時期が早い半促成作型等では群落内への採光・通風を改善するため、葉ができてから 45～50 日経過した葉を中心に積極的に摘葉を行います。草勢維持のため、株当たり一度に 2～3 枚以内を原則としますが、主枝葉が 25 枚程度展開したあとであれば、一度に 5 枚程度摘葉しても問題ありません。

## イ トマト

第 5～6 段花房開花以降、急激に草勢を低下させるケースが多いことから、第 1～3 段花房において、適切に着果制限を行うとともに、生長点が細くなる等の草勢低下の兆候が見える前から、①早めの追肥を実施する、②適正着果数に調整し追肥を行ってからホルモン処理をするなど草勢維持管理を徹底します。

また、6 月の好天時に尻腐れ果の多発や急激な気象変動による生長点の萎れが発生する傾向にあります。今後の生育や天候に留意し、それに見合ったかん水を行います。

## ウ ピーマン

ピーマンは他の果菜類より根域が浅く狭い傾向があるので、気温の上昇とともに着果数や葉数が増加する時期は土壤水分が不足しないようにかん水量や回数を増加します。

初期は V 字型（直立ぎみ）、主枝が伸びてきたら U 字型（開帳ぎみ）に誘引しますが、品種によって生育が異なるため、草勢を見ながら調節し、生長点が上向きになるように誘引します。草勢が弱い場合は、主枝が芯止まりにならないように、側枝を 2～3 節で摘心して主枝を強く伸ばし、過着果にならないよう摘果します。

## エ 病害虫管理

病害では、低温時にハウスを密閉すると湿度が一層高まり、灰色かび病の発生が助長されることから、換気を徹底して風通しを良くするとともに、殺菌剤の予防散布を行ってください。また、細菌病や、ウイルス病の感染拡大を防ぐため、わき芽取り、整枝及び摘葉は傷口が乾きやすい晴天時に行います。

害虫では、アブラムシ類、アザミウマ類及びコナジラミ類などの害虫の発生が目立ってきますので、ウイルス病の感染防止の観点からも発生初期の防除やハウス内外の除草をしっかりと行ってください。

## (3) 露地果菜類の定植と定植後の管理

### ア きゅうり

生育初期に十分に根群を発達させることが、長期安定生産を実現する重要なポイントです。これは、キュウリホモプシス根腐病対策としても非常に重要な基本事項ですので、定植から定植後 1 ヶ月の管理をしっかり行います。

初期生育を良好にするため、防風対策をしっかりと行うとともに土壤水分が適湿な状態でマルチを張り、15℃以上の地温を確保してから定植します。

定植作業は晴天日を選んで行い、根鉢の部分が乾いたら株元にかん水するなど活着を促します。また、定植直後の防風保温対策として、ポリキャップなどの利用が効果的です。

定植後、本葉 10 枚ころまでに主枝の 7 節以下の雌花と 5 節以下の側枝は早めに除去し、着果させる節位は必ず 30cm 以上で 8～10 節からとします。ただし、節間が短い場合や生長点が小さい場合は着果させる節位を 2～3 節上げ、草勢の確保に努めます。6～8 節から発生した側枝は 1 節摘心、それ以上から発生した側枝は 2 節摘心、孫枝は 1 節摘心を基本とします。

病害では、梅雨時期は、「黒星病」「斑点細菌病」「べと病」を重点とした薬剤を選択し予防散布に努めます。なお、最近、一部地域で黒星病対象薬剤の耐性菌が発生している事例が見られますので、薬剤散布の効果が見られない場合は最寄りの農業改良普及センターに相談してください。

### イ ピーマン

トンネル栽培では、日中はトンネル内が高温になりやすく、生育障害（葉焼け、落花等）が発生しやすいので、被覆資材を開放して換気を行います。有孔フィルムは、最低気温が 17℃を超え

る頃を目安に除去しますが、低温が予想される場合は被覆期間を延長します。かん水設備がない圃場では尻腐れ果の発生が懸念されますので、カルシウム資材の葉面散布を行います。

露地栽培では、土壌水分が適湿な状態で定植 1 週間前までにマルチを張り、地温を十分に上げた状態で定植します。定植後は株元かん水により活着と生育促進を図るとともに、仮支柱に固定し風による倒伏を回避します。

露地およびトンネル栽培の整枝は主枝 4 本仕立てで側枝は放任とします。3 本分枝は過繁茂の原因となりやすいので、誘引開始時までに整理します。第 1 分枝の下部より発生するわき芽は随時かきとり、誘引後はふところ枝が過繁茂にならないように適宜剪除します。

誘引は、うねの両側に支柱を立てマイカー線やフラワーネットなどを高さ 50～60cm で水平に 1～2 段張り、枝が垂れ下がらないようにします。

#### (4) 雨よけほうれんそうの栽培管理

5 月 20 日発表の 1 か月予報では、平均気温が平年より高くなる確率が高くなっていますので、ハウス内の温度が上がりすぎないように注意し、換気と適切なかん水を行います。

最近、べと病レース 7 までの抵抗性を持った品種の作付けが多くなっていますが、抵抗性を打ち破るべと病が発生する可能性があります。梅雨入りの平年値は 6 月 15 日ごろであり、ハウス内の湿度が高まりやすい条件になりますので、ハウスの換気を十分行うとともに、適用のある殺菌剤の予防散布を心がけてください。

近年、6 月でも高温になることが多く、萎凋病を中心とした土壌病害が早くから発生しています。例年土壌病害の発生が多い圃場では、計画的に土壌消毒を実施してください。

日長が長くなり、ほうれんそうが抽だいしやすい条件になりますので、抽だいにくい品種を用いることを基本とします。また、生育が停滞しないように、播種前の十分なかん水、温度管理を徹底するとともに、圃場が乾燥する場合は、本葉 3～4 枚以降に生育中のかん水を行ってください。

ホウレンソウケナガコナダニの防除対策としては、次の点を実践してください。

- 未熟な有機物（ワラ、モミガラ、堆肥等）を施用しない
- 農薬使用基準を遵守しつつ、薬液がムラなく十分量かかるように丁寧に散布する
- 被害の見られた株や残さはハウス外に持ち出し処分する
- 生育中のかん水を行い、収穫直前まで圃場の表面が湿った状態を保つ

アブラムシ類の発生が見られる場合は、効果のある殺虫剤で適切に防除します。ホウレンソウケナガコナダニに適用のある殺虫剤は、アブラムシ類に効果のないものが多いので、注意が必要です。

#### (5) 露地葉菜類の害虫防除

##### ア キャベツ

既にコナガ、ヨトウガの成虫の発生を確認しています。

これからコナガの重点防除時期になるので、幼虫の発生を確認したら早めに防除を行います。また、これから定植する作型では、必ず定植時に殺虫剤を施用します。

ヨトウガについては、今後の発生予察情報に留意し、適期防除に努めます。なお、同系統の薬剤の連用とならないように注意して防除します。

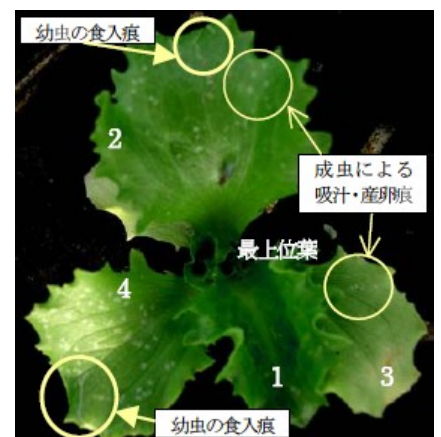
##### イ レタス

ナモグリバエの被害が多くなる時期です。

特に低温で経過すると発生が継続して、生育や収量にも影響を及ぼす可能性がありますので、早めの防除を心がけます。

##### 【防除適期の判断方法】（写真参照）

最上位葉～1 枚目には被害がみられないので、2～4 枚目の葉における幼虫の食入痕の有無を観察します。防除適期は幼虫の食入開始初期（写真の 2、4 葉にみられる被害程度）です。



#### (6) アスパラガスの栽培管理

普通作型のアスパラガスでは、L品の割合が20%以下になった頃が収穫終了の目安です。立茎栽培（二期どり栽培）を行う場合には、さらに早く春芽（立茎前の萌芽）の収穫を終了します。

春の収穫が終了した後、茎葉が繁茂する前から、斑点病、茎枯病を対象とした殺菌剤を予防散布します。なお、近年多発傾向にある茎枯病は、萌芽直後2週間以内の茎で特に感染しやすいため、立茎開始直後が最重点防除時期になります。薬剤のローテーション散布、ひこばえや実こぼれ苗の除去、適正な立茎本数と下枝除去による過繁茂防止、降雨による泥はね防止対策を実施します。

また、倒伏防止用のフラワーネット等の利用や雑草防除により、通風や日当たりを良くするように心がけます。

また、アザミウマ類の発生が見え始める時期ですので、発生を確認したら速やかに防除を行います。

#### (7) ねぎの栽培管理

定植後1ヶ月程度たってから培土を開始し、その後も生育状況を見ながら追肥、培土を行います。生育が遅れている圃場は、無理な培土を行わず、生育に合わせた作業を心がけます。

アザミウマ類やネギコガ、ヨトウムシ類の発生が見え始める時期ですので、初期防除に努めてください。

**春の農作業安全月間** [ 4月15日  
~6月15日 ]  
「全集中 ゆとりの呼吸で 安全作業」

**山火事防止運動月間** [ 3月1日  
~5月31日 ]  
「あなたです 森を火事から 守るのは」

岩手県では例年3～5月に、野焼きが原因と思われる林野火災が多発しております。やむを得ず野焼きを行う場合は火の取り扱いに十分注意しましょう。

次号は6月24日（木）発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。発行時点での最新情報に基づき作成しております。発行日を確認のうえ、必ず最新情報をご利用下さい。農業普及技術課農業革新支援担当は、農業改良普及センターを通じて農業者に対する支援活動を展開しています。